
風上の福寿草

鑄金ダラ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

風上の福寿草

【コード】

N3368C

【作者名】

鍔金ダラ

【あらすじ】

穏やかな昼下がり。学校の屋上で、俺は想っ…。

(前書き)

この小説は【五分企画小説】の参加作品です。

風上の福寿草

「サボり、発見！」

校舎の屋上。

穏やかなる午後。

燦々と輝く太陽と和やかに流れる雲を包容する碧空、そんな清々しい視界に栗毛の女百合のマヌケ顔がぬつと視界に入ってきた。一年前なら驚愕と飛び起きをセツトにして彼女にプレゼントしていただろうが、とつくの昔に耐性は付いた。それでも天然混じりの彼女の行動に狼狽することが多いけど、そこは定評があるポーカーフェイスでカバー！。

「翔太！ また授業、サボったでしょ〜？」

授業？ ああ、成る程。寝過ごしたというわけ、か。

「うるせえ」

百合は両手を両腰に当てて頬を紙風船みたいに膨らませた。それを俺は一瞬視界に収めて直ぐに目を伏せる。頬を膨らました百合が可愛すぎて直視できませんでした、とはたぶん一生言わないだろう。「そんなこと言ったらセンター落ちるよ？」

「いいの」

そう言うのが、俺が走る道は浪人確定コース。そろそろ本気で勉強なる物をした方が良くもしれない。まあ、いざとなったら百合に泣き付こう。土下座してでもご教授願おう。そう思い、目を開けた。「も〜。後で泣き付いたって土下座したって教えてあげないからね！」

「誰が頼むか」

百合のエスパー擬き能力に戦々恐々。けれどポーカーフェイスを貫く。本当に感情が表に出にくい性格で良かったと安堵しながら目

を再び閉じる。

と、隣に気配を感じた。

「んああ？ サボるなって言った人間がソツコーでサボりかよ？」
「いいでしょ。あたしは何処かの『不良君』と違って素行が良いから少しぐらいサボってもいいの」

俺の隣で寝ころんだ百合を横目に溜め息を付く。何か悔しかったから俺は、そんな『不良君』と付き合ってるお前が素行良いわけ無いだろと毒気付くが、百合は愛嬌抜群の笑みを持ち出してきて、あたしは何処かの『不良君』と違って素行が良いから少しぐらい『不良君』を愛したっていいの。だ、そうだ。辻褄が合っているように合っていないような、嬉しいような悲しいような、とにかく複雑な気分である。

「ハッ」

鼻でいなしてやるも、百合は笑う。

俺は百合に一生、勝てない気がして更に溜め息を一つ。
と。風が、吹いた。

それは夏のクセして和やかな、まるで春のような風。

「ねえ、『カミサマ』っていると思う？」

「いねえ。絶対。いたら世界中の不幸が無くなる」

即答する。百合はしばらく黙って、

「そう、かもね。でももし『カミサマ』がいたら、翔太だって、ね」
「……ここまで捻くれなかつただらうな」

俺の『世界』は真っ白から始まった。

十歳の記憶。それが俺の始まりであり、俺が俺として生まれた瞬間でもあった。

理由は単純。生まれてから保護されるまでの十年間、親から非道い虐待を受けていたらしい。一番初めの記憶は真っ白の病院のベッドの上、俺は身体中あちこち包帯で覆われたミイラ人間。その後は

親戚の家、孤児院を盥回し。気がついたら一人になっていた。

泣いた。啼いて、鳴いて、慟哭した。

恨んだ。怨んで、憾んで、怨嗟した。

真つ白だった俺の『世界』は、いつしか真つ黒に変わった。

この『世界』は驚くほど俺たちに無関心だ。

俺が殺そうと、殺されようと。何しようとする人々は俺らに構おうと、手を差しのべようともしない。

所詮、俺たちが生きている『世界』はこんなモノ。

所詮、俺たちが生きている『世界』なんて腐敗の集合体。

人一人を満足させる幸福すら転がっていない。

人一人を救ってやれる優しさすらない。

腐りきった『世界』。

だから、壊そうと思った。

俺をこんなめに遭わせたこの『世界』を壊そう。

腐ったクズ共がのうのうと生きているこの『世界』なんて壊してしまえばいい、と。

この下らない『世界』の住人を、仕組みを、思想を、全て無に返してやるう。

こんな『世界』しか創造できない権力者など全て消してしまえ。

全てを成し遂げた後、瓦礫と『世界』の住人全ての亡骸の上で狂ったように嗤ってやるう。

嗤いながら傷だらけの手で握るナイフで自身の首を掻き斬って死んでやるう。

俺のような境遇は俺だけでもう沢山。この手で非道の連鎖に終止符を打ってやるう。

俺を虐待し尽くした両親に報復を。

俺を壊したこの『世界』に復讐の鉄槌を

「哀しくないの？」

振り払った。

突然舞い降りた優しさ、救い、暖かみを。

その、無邪気で独善独自独裁が怖かった。

知ってしまった、覚えてしまった、味わってしまった。

その、染み渡るように心に広がった優しさが途切れるのが怖かったから。

だから、振り払った。

けれど。

振り払っても、突き放しても。その暖かさは、俺の闇を優しく照らさんとするその暖かさは、俺がどんなに拒絶しようとも、闇に溺れていたことさえも見えていなかった俺に手を差し伸べ続けた。

ある時、理由を問うた俺にコイツははんべそで言った。

「あたしはあなたを見過ごせないの。だって好きなんだもん。だから手を差し伸べるの。確かにそれはあたしのエゴ、自己満足しれない。でも、でもね私は諦めたくない。諦めるってことが自分の心にも凄いい嘘をつくってという事を知っているから。あたしはもう自分の心に嘘をつきたくないから。他の人がどう言おうが私は絶対に諦めない。決めたの。あたしはあなたを助ける。あたしはあなたと笑いたい」

笑う。

俺は起き上がって、

「前言撤回」

ふええ？ と、百合もつられたように起き上がってポカンと俺を
見ている。

「やっぱ『カミサマ』はいるわ」

「ホント？」

「ああ。世界一暑苦しいのがな」

「どこにつ！？」

途端にコイツは目を輝かせる。

「…さあな」

戯けてみせると、百合はクスクス笑って、

「あたし、なんか幸せ」

「ばーか」

幸せだと密かに想って、つまらなそうに欠伸。

「授業に遅れッぞ！」

流石に次の数学はサボるわけにはいかない。

頬を心地好い風が撫でる。バカみたいに笑ってる百合の頭に手を
置いた。

(後書き)

どうも。 鑄金ダラです。 初心者ながら弥生 祐様の【五分企画小説】に参加させて頂きました。 文字数制限ギリギリですが何とか仕上げられました。 このような場を用意して頂いた弥生様には多大なる感謝を。 ありがとうございます。 ご意見ご感想を頂けると幸いです。
ではでは m (_ _) m

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3368c/>

風上の福寿草

2008年11月7日07時44分発行